

一一ノ一二、笠置山記

出典、笠置寺所蔵の原本

解説 黄檗宗の僧、月潭道澄の作。月潭は貞享四年（一六八七年）の春、二度目となる笠置山訪問を友人の雲松律師と共にして、二年後の元禄二年に寺史を再編したもの。同行の雲松が文殊院住持と旧交があり、寺史の再編を依頼されたものであろう。

主として笠置寺縁起をもとに記述されているが、江戸時代の笠置寺を知る貴重な資料でもある。

二度目の笠置寺訪問である貞享四年の紀行は「重遊笠置山作並序」が月潭道澄の著作集である巖居抄に載っているので末尾に記載しておく。この紀行文は、笠置寺に保存されている笠置山十境之詩を作る登山でもあった。

月潭道澄（寛永十三年〜正徳三年 一六三六〜一七一三年）の略歴については一一ノ一五 笠置山十境之詩に記した。

原文

山城州木津之東溯溪流而上三十里有
山名笠置峰高谷峻林樾蒼潤恠石奇巖
錯立層出于煙雲之中山水靈区最為勝
絶信為梵宮仏宇之所宣托也按旧記云
人王第三十九代天智天皇有一皇子性
勇銳好畋獵一日騎駿馬携弓矢趣鹿入
此山比至絶巔馬遽奔馳執轡拽之而不
留驀直進于石壁之上四蹄相交直墜下
十余丈心思驚駭恍如夢中忽有神人扶
掖毫無損傷便下馬憩息巖畔群從漸至
慰勞皇子從容告謂我命幾危非神仏加
護則豈能得活乎願当就此処雕刻弥勒
菩薩尊像上答洪恩下利群生遂將所戴
藺笠置于石上以為標識既而率群從還
宮闕越数日復命駕到石壁之下方經画
間倏有化人来助為鐫勒不日而厥功既
畢聖相円満皇子感悦益深叡信普集四
衆慶讚供養笠置本名鹿鷲自是更今名
云速天武帝白鳳十一年辛未朝廷有旨
勅立精藍因山賜名号笠置寺広殿崇閣

架巖聳雲極其壯麗道俗拝瞻其無以異
登兜率陀天欽奉慈嚴親聞円音也役小
角者神異不測之人也日域靈区修歴殆
遍嘗入此山千手窟内行秘密法聖武皇
帝創東大寺採材於伊賀山將流下于木
津川至此山麓則巨石横亘水勢湍急舟
筏難通有司病焉漸達天聰特召良弁僧
正謀之僧正承旨即入千手窟内修法祈
念忽霹靂轟空電閃雨射林岳為之揺震
洪水暴漲石崩流平筏路漸通良材輻湊
天工法力可謂両奇矣実忠和上者良弁
之上足也嘗神遊于兜率内院乞聖衆得
常念觀音院修法儀軌後就此山構一堂
以天平勝宝四年壬辰正月朔始修其法
二七晝夜感得十一面觀自在現妙色身
降臨壇場又以同年二月朔於東大寺羅
索院修法如前自古迄今勝軌永行矣桓
武天皇延暦十三年甲戌南京碩德普集
此山始開法華八講会倣石淵勤操之式
云嵯峨天皇弘仁年間弘法大師飛錫於
此山於虚空蔵菩薩石像前修求聞持法
于時明星放光照耀像上光之所及石尚
窪焉金峰山日蔵上人入千手窟五七日
修密供感得諸天散花後上人勸請金峰
椿本大明神永為此山鎮守泰昌年間醍
醐天皇幸於此山菅丞相為扈從丞相親
其聖境發願吾当於未來際托跡此所利
益含識繇是里人立廟奉之号栗栖宮歲
時祭祀威靈益彰彰安元年間後白河太上
皇臨幸瞻礼石像特詔寺僧令修法事每
歲春秋二期法華八講会及長日仁王講
不断誦誦法華等皆依勅旨或遵御堂関
白道長公鎌倉右大将頼朝公鈞命而行
之各賜腴田永充香燈之資焉沙門貞慶
者藤尚書左丞貞憲之子也壯歲出家居
興福寺菩提院專学相宗究其奥旨有才

「昌泰」転倒符で訂正されている

弁之譽性好寂靜不樂浮競嘗眎此山之幽邃眷々于懷竟移瓶錫戾止焉巖棲澗飲與世邈如修習唯識觀々法既成云後鳥羽院上皇欽其德望遣使召入宮闕登座講說聳動宸聽特賜解脫上人之号自是世人不名而但称笠置上人耳建久五年甲寅秋上人造六角堂於山南般若台院奉安釈迦文仏像復書写大般若經六百卷置仏龕内其經皆紺紙金字函軸精緻又於龕扉内繪四聖八天像莊嚴妙麗難以言諭如上興造盖由勅願也故上人承旨於上梁前躬詣伊勢神祠祈請護法時殿扉自啓神現其形上人感喜投礼須叟而陰迄回奉神御於堂内云七年丙辰重修大殿上人自製疏文募化遐邇人民上皇聞之不勝歡感即賜勢州蘇原莊田若干畝令充營繕之費遂鳩断木陶土之工相與從事大殿工竣次第修整經藏宝塔門廡庖湑之属締構煥然視昔有加非上人福智兼備豈能如是哉後鳥羽順德二上皇各降勅宣於山場四至界内嚴禁漁獵殺生上人又以元久元年甲子十一月十七日始行龍華大会意欲使一切有緣全結三會勝緣也有自述願文辞意懇到読者莫不興感矣後醍醐天皇元弘元年国運衰變干戈騷動天皇避難臨幸此山駐蹕月余東兵馳聚圍之然此山形勝之区四面險絶自有金城湯池之固官軍恃此不意一夕武卒自北峯梯巖而上竊入皇居縱火焚之虐燄亘天宝坊灰燼化人雕刻之像既遭燬損祇樹鬱密之林亦多焦枯闕伽池頻戰血汚流般若台畔敗旗委地天皇遷龍馭於侘所群臣盡離散於四方見者蹙頰聞者慘心衆僧失其所居寺産亦為豪右被奪此山禍災莫若斯時抑且劫数之使然乎迄乎天皇重祚雖

「釈迦文仏」(殊が抜け?)

有再興之議而朝廷多故未果厥事自爾
以降三百年来金地荒涼無有能起廢者
逮正保五年戊子秋藤堂大學頭伊賀侍
從高次公以此山屬食邑管内觀靈場之
寥落不勝咨嗟遂就弥勒前鼎建一堂且
歲施僧糧若干石令掌香火焉余以貞享
丁卯春重過山頂礼石像訖徘徊于巖庭
苔礎之側而自嘆曰吁茲山自開創已來
迄今千有余載其間興廢代謝不知其幾
唯此石像雖兵燹燬損尊容隱没而寶石
儼然法身常在歷風霜而不泯閱歲月而
無渝倘有解脫之輩乘願轂而再來化風
普被神力宏施致使阿逸多露久隱之慈
顏僧伽藍煥重新之華構晨鐘夕梵與溪
声松籟常轉法輪於未來際上祝 聖躬
下福黎庶共享無為之化齋入菩提之場
則豈非大饒益哉茲者寺僧文殊院卜信
等以旧記蠹損而文理難通需余重製因
為緝録寺像顛末以昭來者云是為記

皆

元禄二年歲旅己巳仲冬穀旦

峩山嗣祖沙門月潭道澄和南敬撰

読み下し文

山城州木津の東、溪流を溯りて上ること三十里、山有り。笠置と名づく。峰高谷峻（峰高く、谷峻し）、林樾蒼潤（樹陰あおくうるおう）し、怪石奇巖、煙雲の中に錯立層出（かさなつて）す。山水の靈区（靈地のこと）最も勝絶と為す。信に梵宮仏宇（寺院）の宣しく托すべき所なり。

旧記（笠置寺縁起等）を按ずる（調べる）ことに云う。人王第三十九代天智天皇に一皇子有り。性勇銳にして、畋獵を好む。一日（ある日）駿馬に騎し、弓矢を携へ、鹿を趨おいて此の山に入る。絶巖に至る比、馬遽に奔馳し、轡を執り之を拽くも留まらず。驀直して石壁の上に進み、四蹄（四本の足）を相い交う。直ちに墜下すること十餘丈、心思驚駭し、恍（ほんやり）するさまとして夢の中の如し。忽ちにして神人有り、扶掖（助ける事）して毫も損傷すること無し。便ち馬を下り、巖畔に憩息（しばらく休むこと）す。群從漸くにして至り、慰勞す。皇子從容（おちついて）として告げて謂く、「我が命幾ど危く、神仏の加護あらずんば則ち豈能く活くるを得んや。願くは当に此の処に就いて弥勒菩薩の尊像を雕刻し、上、洪恩（大恩）

に答え、下、群生(全ての生き物)を利せん」と。

遂に戴く所の藺笠を將りて石上に置き、以つて標識と為す。既にして(そんなことがあって後)群従を率い宮闕(皇居)に還る。

数日を越し、復び駕を命じ石壁の下に到る。経画する間に方つて倏(たちまち)に化人有り。来りて鐫勒(石に刻み記すこと)を為すを助く。不日(日数をあまり経ないこと)にして厥の功既に畢へ、聖相円満たり。

皇子感恍(心に感じよろこぶ)し、益深く叡信して普く四衆(出家、在家の仏教徒)を集め、慶讚供養(落慶供養)す。笠置、本の名は鹿鷲、是れより今の名(笠置)に更むと云う。

天武帝白鳳十一年辛末に逮び、朝廷、旨(命令)有りて精藍(すぐれた伽藍)を剏立(新たに建てる)す。山に因り名を賜りて笠置寺と号す。広殿崇閣、巖に架かり雲に聳へその壮麗を極む。道俗(僧侶と俗人)拝し瞻ぐに、其れ以つて兜率陀天(弥勒の修行する天)に登り、欽んで慈巖に奉り、親しく円音(仏の声)を聞くに異なること無き也。

役小角は神異(人間わざでないこと)不測(思いがけないこと)の人なり。日域(日本)の靈区(靈地)を修歴すること殆んど遍し。嘗つてこの山の千手窟内に入り秘密の法を行う。

聖武皇帝、東大寺を創るに、材を伊賀山に採る。將に木津川を流し下さんとするも、此の山の麓に至り、則ち巨石横亘(よこたわる)、水勢湍急(急流)にして舟筏(ふねといかだ)通り難く、有司(官吏)病う。漸くにして天聽(天子の耳に入る)に達し、特に良弁僧正を召して之を謀る。僧正、旨(命令)を承わり、即ち千手窟内に入りて、修法祈念するに、忽ち霹靂(雷鳴)空に轟き、電閃(いなづま)雨を射る。林岳之がため揺震(ふるえうご)く、洪水暴漲(俄に水がみなぎること)して、石崩れ流平らとなる。筏路漸くにして通じ、良材輻輳(四方から集まること)す。天の工、法の力、両つながら奇と謂う可し。

実忠和上は良弁の上足(弟子)なり。嘗つて兜率の内院に神遊し、聖衆に乞いて常念觀音院にて修法の儀軌(儀法)を得る。後にこの山に就き一堂を構う。天平勝宝四年(七五二年)壬辰正月朔を以て、始めてその法を修すること二七昼夜、十一面觀自在、妙色身(言葉に表せられない美しい色の体)を現はし、壇場に降臨するを得(感じる)ことす。又同年二月朔を以て東大寺胃索院に於いて法を修すること前の如し。古より今迄勝軌永く行はる

桓武天皇延暦十三年(七九四年)甲戌、南京(奈良)の碩徳(高僧)、普くこの山に集い、始めて法華八講会を開く。石淵(寺)勤操の式に倣うと云う。

嵯峨天皇弘仁年間(八一〇〜八二四年)、弘法大師、この山に飛錫(僧が各地を巡り歩くこと)し、虚空藏菩薩の石像前に於いて求聞持法を修す。この時、明星光を放ち、像の上に照耀(てり輝く)す。光の及ぶ所、石尚窪ぼめり。

金峰山の日藏上人、千手窟に入りて、五七(三十五)日、密供(祈祷)を修し、諸天の散花するを得得す。後に上人、金峰の椿本大明神を勧請(神仏の来臨を乞う)し、永くこの山の鎮守と為す。

昌泰年間(八九八〜九〇一年)、醍醐天皇この山に幸す。菅丞相(菅原道真)扈従(付き従う)

を為す。丞相その聖境を覩て發願するに、吾れ当に未來際（世のあらん限り）に於いて、跡をこの所に托して、含識（衆生）を利益すべしと。是に繇りて里人廟を立て、之を奉じて栗栖宮と号す。歳時（四季）の祭祀により、威靈（威力ある神靈）、益、彰かなり。

安元年間（一一七五〜一一七七年）、後白河太上皇臨幸し石像を瞻礼し、特に寺僧に詔して法事を修せしむ。毎歳（毎年）春秋二期の法華人講会及び長日仁王講不斷の讀誦法華等、皆勅旨に依りて、或いは御堂関白道長公、鎌倉右大将頼朝公の鈞命に遵い之を行ふ。各腴田（肥沃な田）を賜り、永く香燈の資に充つ。

沙門貞慶は藤尚書左丞貞憲の子なり。壯歳にして出家し、興福寺菩提院に居す。専ら相宗（法相宗）を学びて其の奥旨（奥義）を究め、才弁（巧みな弁舌）の誉れ有り。性寂靜を好みて、浮競（かるがるしく人に諂って利益を争い求める）を樂しまず。嘗つてこの山の幽邃なるを眎（視の古字）て、懷に眷々（いつも心にとめて）たり。竟に瓶錫を移して戻ること止む。巖に棲み、澗を飲み、世と邈如たり。唯識觀を修習し、觀法既に成れりと云う。

後鳥羽院上皇、その徳望を欽い、使を遣し、召して宮闕に入れしむ。座に登り講説せしむるに、宸聴を聳動（驚かし、動かすこと）す。特に解脱上人の号を賜う。是より世人名をよばずして但笠置上人と称するのみ。

建久五年（一一九四年）甲寅の秋、上人六角堂を山の南、般若台院に造り、釈迦文（殊が脱か）の仏像を奉安（安置）す。復た大般若經六百卷を書写し、仏龕内に置く。その經は皆な紺紙金字、函軸は精緻、又龕扉の内に於いて四聖八天像を絵く。莊嚴にして妙麗、言を以て諭し難し。如上（以上述べたと通りに）に興造（おこしたてる）するは、蓋（蓋の古字、けだし）、勅願に由りてなり。故に上人旨（命令）を承り、上梁前に於いて躬ら伊勢神祠に詣ず。護法を祈請するの時、殿の扉自から啓き、神その形を現す。上人感喜して投札す。須叟（しばらくの間）にして隱る。迄（い）に、神御を堂内に回し奉つると云う。

七年丙辰（一一九六年）、重ねて大殿を修す。上人自ら疏文を製し、遐邇（遠近）の人民に募化（金品などの寄進を求めること）す。上皇之を聞き、叡感に勝（た）えず。即ち勢州蘇原の莊田若干畝を賜い、營繕の費に充てしむ。遂に斲木陶土（木を削り土をこねる）の工を鳩（あ）め、相い與に事に従わせ、大殿を工竣し、次第に経藏、宝塔、門、廡（む）、庖（ほ）、溜（ゆる）の属を修整す。締構（結び構える事）煥然（光り輝くさま）とし、昔に視るに加うものあり。上人の福智（菩薩の善を行つて徳を積む福行と、自己の悟りを完成するための智行）兼備非ざれば、あに能く是の如くならん哉。

後鳥羽、順徳二上皇、各勅宣を降し、山場四至の界（東西南北四方の境界）の内に於いて漁獵殺生を嚴禁す。

上人又元久元年（一二〇四年）甲子、十一月十七日を以て始めて龍華の大会を行う。意は一切有縁をして同じく三会の勝縁を結ばしめんと欲すればなり。自ら述ぶる願文有り。辞の意は墾到（十分に行き届くこと）にして読む者、感を興さざること莫し。

後醍醐天皇元弘元年、国運衰変し、干戈（戦争）騒動す。天皇難を避けこの山に臨幸す。蹕（天子の行幸の車）を駐ること月余（一ヶ月余）、東兵馳聚し、之を圍む。然れども此の山、形勝（要害の地）の区（ところ）にして四面峻絶し、自ら金城湯池（堅固な城と堀）の固め有り。官軍此に恃めども、不意に一夕、武卒北峯自ら巖に梯して上る。窃に皇居に入り、火を縦ちて之を焚く。虐燄（ひどい炎）天に亘り、宝坊灰燼し、化人彫刻の像、既に燬損に遭う。祇樹（境内の樹木）鬱密の林、また多く焦枯し、閼伽池の頻に戦血汚流し、般若台の畔に敗旗委地（地上に捨てられたままになっているさま）さる。天皇龍馭（天子の車）を侘所（わびしいところ）に遷し、群臣盡く四方に離散す。見る者蹙頞（憂えるさま）し、聞く者惨心（心をいためる）す。衆僧其所居（すまい）を失い、寺産また豪右（勢力のある家柄）が為に奪わる。この山の禍災（わざわい）斯の時にしくはなし。そもそも且つ、劫数（劫としてうける災厄）のしからしむところか。

天皇重祚（復位）に迄んで、再興の議有りと雖も、而るに朝廷多故（難しい事件の多いこと）にして未だ厥（そ）の事を果たせず。爾より以降三百年来、金地（仏寺）荒涼のまま、能く廢るを起す者有ること無し。

正保五年（一六四八年）戊子、秋に逮び、藤堂大学頭伊賀侍従高次公（藤堂藩二代目藩主）、この山、食邑（領地）の管内に属するを以て、霊場の寥落たるを覩て、咨嗟（なげくこと）に勝ず、遂に弥勒の前に就き、鼎に一堂を建て、且つ歳施の僧糧若干石をして香火に掌さざらしむ。

余貞享丁卯（一六八七年）春を以て重ねて山頂を過ぐ。石像に礼し訖りて、巖庭苔礎の側を徘徊し自ら嘆きて曰く。吁、茲の山、開創より已来、今に迄る千有余載、其の間の興廢代謝、其の幾ばくたるかを知らず。唯だこの石像、兵燹に燬損し、尊容隠没すと雖も、而も寶石（ここでは弥勒石）儼然（厳かで気高い様）、法身（永遠の真理、そのものとしての仏。ここでは弥勒仏）常在し、風霜を磨るも泯びず、歲月を閱えるも渝る無し。尚し解脱の輩有りて、願轂（願いの車）に乗じて再来せば、化風普く神力の宏施（おおきい施し）を被け、阿逸多（弥勒菩薩の異称）をして、久隱の慈顔を露しめるに致り、僧伽藍（仏寺）をして重新の華構（華やかな構え）を煥（光り輝く様）せしむ。晨鐘夕梵（朝夕の鐘の音）は、溪声松籟に與し、常に法輪（仏法のこと）を未來際（世のあらんかぎり）に転じ、上、聖躬（天子）を祝し、下、黎庶（多くの民）を福し、共に無為（さとりの）の化を享けて、齋しく菩提（さとりの）の場に入る。則ち豈、大饒益（ゆたかなこと）に非ずや。

茲に、寺僧文殊院卜信等、旧記、蠹損（虫害により損ずる）し、文理通り難きを以って、余に重製を需む。因つて為に寺像の顛末を緝録し、以つて来る者に云うを昭にし、是を記と為す。

皆に 元禄二年（一六八九年）歳旅己巳仲冬（陰曆十一月）穀旦（吉日）

叡山嗣祖沙門月潭道澄和南敬撰す

一一ノ一六、重遊笠置山作並序

出典 巖居稿 公文書館内閣文庫に所蔵の和本。

解説 月譚は貞享丁卯（一六八七年）春に二回目笠置登山を行い、二年後に笠置山記を完成させた。この際の記録がこの重遊笠置山作並序である。名文である。長い序文の後に漢詩がある。これを発展させたのが笠置山十題であろう。

原文

重遊笠置山作並序

歳丁卯杪春庚寅ノ日、余踐テレ約ヲ訪フニ雲松律師ヲ於現光精舎ニ、翌日松公欲スニ導イテレ余ヲ再ヒ探ントニ笠置ノ之勝ヲ一、早粥罷テ乃欣然トシテ命シテ策ニ偕ナヒ行ク、路溯ッテニ木津川ニ而上ル、兩岨夾峙ッテ、一水縈紆タリ、如シレ経ニ歴スルカ于画図ノ中ニ、既ニ行クコト十里余、矯レ首ヲ前ニ望メハ則有レ山、鬱然トシテ拔コ起スル於衆峰ノ之間ニ者ハ、即笠置山ナリ也、山ノ之麓トニ有レ二墟落一、居民鮮少ニシテ而風俗淳朴ナリ、野花開ケテ而芳馥アリ、幽鳥啼イテ而間関タリ、過ル者恍トシテ入ニ武陵桃源之境ニ、迤邐曲折漸ク登ルニ其巔ニ、首メニ抵シテ南台ニ憩フニ文殊院ニ、院主与ニ松公一有リニ旧好一、喜ンテ而接入ス、茗譚稍久シテ日將サニ亭一午ナラント一、院主具ナフニ香飯一、飯訖テ出テ院ヲ北ノ方行クコト数百武而蒼檜四ニ環ツテ極ムニ其ノ幽閒ヲ一、有テニ古ノ招提ノ基一存ス焉、有リニ弥勒石一、高サ六丈許リ撐ヘテ天ヲ壁立、一平如シレ掌大士ノ聖影隱トシテ不レ可弁ス、相伝方ツテ鼎盛ノ之時ニ穹楼傑閣蕩ニ摩ス雲煙ヲ一如シニ率陀宮ノ從リレ空墜下スルカ一、逮ンテニ元弘ノ国變ニ一、後醍醐天皇避ケ玉フニ難ヲ於此山ニ、一夕兵燹俄ニ起ツテ紺宇灰燼ス、因テレ之ニ大士ノ像モ亦遭ルトニ燬損ニ云フ、又左ニ有リニ石壁一、高サ減スニ其ノ半ニ、上ニ鐫ルニ虚空藏菩薩ノ像ヲ一、鮮明可レ觀ル、是レ蓋烈燄ノ所ナリレ不ルレ及ハ者ナリ、不レ知ラ、何レノ代ノ神僧カ為メニ諸ノ衆生ノ一作スニ大饒益ヲ一、懋イカナ哉、厥ノ功永ク與トモニ此山一、不レ朽チ也、又左ニ転シテ入ルニ一洞ニ嵌巖中坵ケテ陰氣逼レレ人ニ、既ニ穿テ洞ヲ少クク進メハ則崖漸ク峻フシテ路益險、恠石・研トシテ欹チレ壑ニ、横フレ嶺ニ大ナル者ハ如クニ船舫ノ一、如クニ屋宇一、小ナル者ハ似ニ臥牛ニ、似タリニ伏虎ニ、其ノ平ナル者ハ、可レ坐セシムニ百余人ヲ一、天造地設、神奇万状、非シハニ羅漢聖僧游息之所ロニ、則安ッ有シヤニ如キノレ是絶勝ニ平、余與ニ松公ニ箕ニ跪シテ盤陀ノ之上ニ、仰イテ觀ニ山色ヲ一、俯シテ瞰ニ溪流ヲ一、上下相映シテ、一碧如シレ藍、触レレ石ニ衝イテレ岩ニ、其ノ声雪霽然タリ、余語ツテニ松公ニ曰ク、妙ナルカナ哉、此ノ境殆シト非スニ人間世ニ一也、曩シ解脱上人、視テ下夫ノ贗浮屠ノ徒ニ競ツテニ浮誇ニ不ルヲ上遵ハニ戒律ニ一故ニ不レ喜ハ、ニ與レ此輩頡頏スルコトヲ一、破笠瘦筇自リニ宮掖ノ講筵一、直ニ遁ルニ此山ニ一、覓カニ絶シテ二人縁ヲ一、修シテ道ヲ畢フレ世ヲ、距コトレ今ヲ四百有余載、遺風凜凜トシテ聞者、

孰カ不_レンヤニ欽慕セ_一乎、然ラハ則人ハ因_レテ境ニ而益傑ニ境ハ因_レテ人ニ而増靈トナリ人カ乎、境カ乎、非
スレ同ニ非スレ異ニ、由_レテ是ニ觀_レハ_レ之ヲ、山光雲影尽ク頭ハシニ上人清淨法身ヲ一、溪声松籟無_レ
非ト云コトニ上人ノ広長舌相ニ一、見聞脱落触処全眞擬議纒ニ生スレハ遠クシテ之遠シト矣、松公唯唯_{タリ}、
忽チ見_テニ夕陽ノ下春ニ急ニ履_ンテ_ニ巘_ト而下ル、及_ンテ_レ帰ル_ニ精舎ニ一、從者具_ナヘ_テニ鉛槧_一索_ニ余
カ紀遊ヲ一、因_テ賦ヌ_ニ一律ヲ一、

危蹊数里踏ム_ニ羊腸ヲ一、

笠嶠重登_レハ興_レ轉_レ夕長シ、

未_レタレ問ハ_ニ醜皇停蹕_ノ処ヲ一、

先尋_ヌ慶老_隠蹤_ノ場、

溪山画_キ出_ヌ真如_ノ境、

花木醸_{モシ}成_ヌ解脱_ノ香、

石壁巉_巖奇恠_甚、

卻疑_フ身到_ルカト_ニ鴈台_ノ陽_ニ一

読み下し文

歳、丁卯（一六八七年）杪春（春の暮れ）庚寅の日、余は約に_{したがい}踐_て（実行すること）雲松律師
（後水尾天皇や東福門院とも関係を持っていて仏教教学全般に明るく、真言密教や戒律、禅にも精通して
いた僧）を現光精舎（雲松は木津川市加茂町現光寺を再興）に訪ぬ。翌日、松公、余を導いて再び
笠置の勝を探らんと欲す。早粥を罷_{やめ}て乃ち欣然として策_{つえ}を命じて偕_{とも}に行く。
路は木津川を溯りて上る。両崖夾_{きま}峙_ち（両側からそばだつ）して、一水縈_{けい}紆_う（うねりまがること）
したり。画図の中に経歴するが如し。既に行くこと十里余、首を矯_あて前を望めば則ち山有り。
鬱然（こんもりと茂るさま）として衆峰の間に拔起するは即ち笠置山也。山の麓に墟落（むらざ
と）有り。居民鮮少（非常に少ないこと）にして風俗淳朴なり。野花開けて芳馥（芳しい香り）
あり。幽鳥（山の奥深く住む鳥）啼いて間_{かん}闕_{かん}（鳥の声を表わす）たり。過る者恍_{こう}（ぼんやりしてい
るさま）として、武陵桃源（陶淵明物語るところの仙境。桃源郷）の境に入る。

迤邐（斜めに行くさま）曲折（折れ曲がるさま）して漸く其の巔に登る。首めに南台に抵_{いた}りて
文殊院（笠置山南の峰、稻荷社の南側下にあった。今は島となっている）に憩_いう。院主、松公と旧好
有り、喜んで接入す。茗_{みょう}譚_{たん}（茶を飲み、話をする）こと稍久くして、日将_{まさ}に亭午（正午のこと）
ならんとす。院主香飯_{かうはん}を具_とう。

飯_お訖_わて、院を出、北の方へ行くこと数百武（半歩の長さ、三尺）にして、蒼檜四（四方）に
環_わつて其の幽_{ゆう}閑_{かん}（ひっそりと静かなこと）を極む。古の招提（寺院のこと）。の基有りて存す（弥
勒石前の本堂付近に礎石の跡が残る）。

弥勒石有り。高さ六丈許り。天を撐たかえて壁立ひょうりつす。一平なること掌の如し。大士(仏のこと)。ここでは弥勒(仏)の聖影隱せいえい薄暗はくあんくものさびしいさまとして弁べんずべからず(あきらかでないこと)。相伝(代々伝わること)に鼎盛(最盛期)の時に方かたつて穹楼傑閣きゆうろうけつかく雲煙うんえんを蕩摩とうます。率陀宮(兜率天)。弥勒菩薩(のいる天)の空くう従より墜下たいていするが如し。

元弘の国変(おとよ)に速おとよんで、後醍醐天皇難を此山に避けたまう。一夕兵燹(兵火のこと)俄かに起つて紺宇(仏寺)灰燼かいじんす。之に因つて大士の像も亦燬損に遭うと云う。

又左に石壁有り。高さ其の半ばに減ず。上に虚空蔵菩薩の像を鐫る。鮮明さ観る可し。是れ蓋し烈燄(れつえん)(激しい炎)の及ばざる者なり。知らず、何れの代の神僧が諸の衆生の為めに大饒益(大きな利益を与えること)を作すかを。懋もうい哉、厥その功、永く此山と與に朽ちざらん也。

又左に転じて一洞に入る。嵌巖(かんがん)(岩にできた洞窟)の中、圻さけて陰気人に逼る。既に洞を穿ちて少し進めば、則ち崖漸く峻うして路は益險しく、恠石・研として壑(たに)に欹そはだち、嶺に横たう。大なる者は船舫(ふね)の如く、屋宇(家)の如く、小なるは臥牛に似、伏虎に似たり。其の平なる者は(平等石を指すか)百余人を坐せしむ可し。天造地設、神奇万状は羅漢聖僧游息(くつろぎ、憩う)の所に非ずんば、則ち安(やす)ぞ是の如きの絶勝(景色の優れたところ)有らんや。余、松公と盤陀(石がわだかまって平らかでないさま)の上に箕踞(ひざまずくこと)して、仰いで山色を觀、俯して溪流を瞰(見下ろすこと)、上下相映じて、一碧の藍の如し。石に触れ、岩に衝いて、其の声書雪然(とどろき、ひらめくさま)たり。余、松公に語つて曰く、妙なる哉、此境殆んど人間世に非ず也。

曩(以前)に、解脱上人、夫の賈浮屠(にせ僧)の徒(いた)らに、浮誇(おごりたかぶること)を競つて戒律に遵したがわざるを視て、故に、此輩と頡頏(けつてい)(張り合うこと)するを喜ばず。破笠、瘦筇(せうそう)にて、宮掖(宮中)の講筵(講義する席)自り、直に此山に通る。夔(はるか)に人縁を絶して道を修し、世を畢る。今を距ること四百有余載、遺風凜凜(畏敬の念を起こさせるさま)として、聞く者孰たれか欽慕(うやまい、したうこと)せん乎、然らば則ち人は境に因つて益傑(ますます)(すぐれること)に、境は人に因つて増ます靈たまとなる。人か、境か。同じに非ず、異なるに非ず。是に由つて之を觀れば、山光雲影、尽く上人の清淨法身を顕あらわし、溪声松籟、上人の広長舌(仏の三十二相の一つ)。転じて雄弁(おとこべん)に非らずと云うこと無し。

相い見、聞きて脱落、触処(いたるところ)全ったくの眞にして、擬議ぎぎためらうところ纔すこに生ずれば、之を遠くして遠しとするや。松公唯唯(承諾の言葉)ハイハイたり。忽ち夕陽の下春(日の暮れかかる頃)なるを見て、急に嶮岨(山々)を履んで下る。精舎(加茂現光寺)に帰るに及んで、從者鉛槧(えんせん)(筆と紙)を具もなえて余が紀遊(もと)を索もとむ。因つて一律を賦す。

危蹊数里踏羊腸 危蹊数里、羊腸を踏む

笠嶠重登興轉長 笠嶠（笠置の山道）重ねて登れば興に転うた（いよいよの意）長し

未問醍皇停蹕処 未だ問わず醍皇（後醍醐天皇）停蹕（行幸）の処

先尋慶老隠蹤場 先に尋ぬ慶老（解脱上人貞慶）隠蹤の場

溪山画出真如境 溪山画き出すは真如の境

花木醸成解脱香 花木醸し成すは解脱の香

石壁巉巖奇恠甚 石壁巉巖（岩山が険しく高いさま）奇恠甚だし

卻疑身到鴈台陽 卻あおむきて疑う、身は鴈台（鴈山、中国山西省にあり、険しい山谷で知られる）
に到るか